

9月20日(土)・大会1日目 10:00~11:30 (C会場:17512教室)(90分)

●セッション【1】

「『よいこと』を『上手に成し遂げる』方法」を考える学問としての経営学再考

* 吉村典久(関西学院大学専門職大学院経営戦略研究科 教授)

鈴木竜太(神戸大学大学院経営学研究科 教授)

田中一弘(一橋大学大学院経営管理研究科 教授)

宮本又郎 氏(大阪大学名誉教授)

山田幸三(大妻女子大学社会情報学部 教授)

* セッション・リーダー

[概 要]

経営学は、「『よいこと』を『上手に成し遂げる』方法」を考える学問だといえる。本セッションでは、2024年12月にご逝去された加護野忠男先生の代表的業績を振り返りつつ、こうした意味における経営学のあり方を考える。「『よいこと』を『上手に成し遂げる』方法」との定義は、加護野先生のご著書(『経営は誰のものか:協働する株主による企業統治再生』、p.238)で示されたものである。

加護野先生の研究に通底してきたのは、「よいこと」を巡る議論である。研究者としてのキャリアを始められた1970年代、加護野先生が深く関心を寄せられていたのは、ドイツ経営学、そして、当時、企業支配論あるいは企業目的論と呼ばれた分野であった。現代の企業統治論と呼ばれる分野に取り組みれていたのである。企業あるいはその経営者が目するもの、目すべきもの、また、それに影響を及ぼす仕組み(株式の所有構造など)について、理論的のみならず実証的な研究に取り組まれていた。くわえて1990年代半ば以降に日本を含め各国で、企業統治を巡る議論が活発に行われるようになった際にも、加護野先生は、企業そして経営者の目指すべきものについて、積極的に発言をなされた。

くわえて加護野先生は1970年代中頃からは、「上手に成し遂げる方法」についても、研究を深められた。製品・サービス市場と企業の関係、経営戦略の立案そして実施について、特に、日本企業のそれに関する実証研究をリードされた。「訓詁学」ではなく、また、大学の枠を超えての共同研究といったスタイルの先駆けともなられた。それらの成果については記すまでもなからう(代表的な1冊は『日米企業の経営比較』であろう。この研究で加護野先生は、上手に成し遂げる姿の差異のみならず例えば、日米企業の企業目的の差異に非常に関心も持たれている)。コンティンジェンシー理論がそう

であるように、こうした諸研究の背景には、加護野先生の組織論分野への深い関心があった。その掘りをされたのが例えば、『組織認識論』である。こうした加護野先生の研究は、組織論研究を深めんとする後進の研究者の研究に大いなる刺激を与えるものであった。また、国際比較や海外移転の視点も含めて、日本企業の経営戦略の立案・実施を支えた日本的な特徴、仕組みについても、加護野先生は常に関心を寄せられてきた。この点も、後進の研究者に研究上の刺激を与えるものであった。

さらに加護野先生は、「「よいこと」を「上手に成し遂げる」方法」を実践されてきた経営者の姿にも深い関心を寄せられてきた。稲盛和夫、松下幸之助、さらに、出光佐三、さらには、神戸の鈴木商店を日本を代表する総合商社に育て上げた金子直吉などである。彼らが追い求めたものは何だったのか、また、それをいかように上手に成し遂げていったのか。

セッションにおいては、加護野先生の研究から直接・間接的に影響を受けつつ、それを乗り越えることを目指してきた研究者、あるいは、同世代しかし隣接分野の研究者として、互いに切磋琢磨してきた研究者に登壇いただく。それぞれの立場から加護野先生の研究を振り返りつつ、今後の組織論、経営学研究のあり方を論じる。

〔 参加者へのメッセージ 〕

最初、セッション・リーダーである吉村からセッションの趣旨説明をした後、「よいこと」「上手に成し遂げる方法」、そして企業家に関わって、田中、鈴木、宮本（宮本はオンライン）から報告を行う。そうした報告を受けて最後、山田によるクロージングとなる。加護野先生の研究の歩みを振り返りつつ、是非、セッション参加者の皆さんで、今後の組織論、経営学研究のあり方について考えていくセッションとしたい。

多くの学会員のご参加をお待ちしております。